



追い込まれた状況でも 「自分が何とかする」 その体験が人をつくる

ふくしま のぶ お
福島 信夫 (1922~1999年)



■福島工業 株式会社

本社所在地：大阪府大阪市西淀川区御幣島3-16-11 従業員数：1,993名 資本金：27億6,000円
設立：1951(昭和26)年12月8日
事業内容：業務用冷凍冷蔵庫、冷凍冷蔵ショーケース、その他冷凍機応用機器の製造・販売・メンテナンス、
店舗システム、厨房総合システム的设计・施工

自分が何とかしなければ

1932(大正11)年、大阪市福島区で、ある男の告別式が執り行われた。木製品を作る工場を経営し、10人ほどの従業員とともに、自身も家具職人として仕事に精を出していたが、若くして腸結核に蝕まれ、わずか30年程の人生だった。

喪主を務めたのは、当時10歳の長男・福島信夫であった。位牌を抱いて葬列の先頭を歩く信夫の心には、父を失った悲しみと不安、そして長男としての責任が渦巻いていた。「自分が何とかこの家族を支えていかなければ」。もちろん、10歳の子どもに具体的な案があったわけではないが、この時の「何とかしなければ」という想いは信夫の心に深く刻み込まれた。

5人兄弟の長男として生まれた信夫は、父の死後、「少しでも早く仕事について稼がなければ」と強く意識するようになった。それゆえ、当然の流れとして旧制中学校(現在の高等学校にあたる)への受験などは考えておらず、勉学にはなかなか身が入らなかった。

卒業後は、学校の推薦で鉄工所へ就職することとなった。しかし、「自分には他に何かやるべき仕事があるのでは」という違和感が頭をもたげ、信夫はすぐに最初の仕事を辞めることとなった。その後いくつかの職場を経験したが、いずれも自分には合わないと感じて退職を繰り返した。



若き日の信夫

鉄工所の仕事に気が乗らず、転職を繰り返した信夫は、自分一人で稼げる方法を模索した。早朝の市場で大量の果物と野菜を買い、市街で売り捌く行商のようなこともしてみたが、上手くはいかなかった。

「冷やす技術」との出会い

信夫は、何もかもがうまく進まないことに苛立ち、不貞腐れ、同じような仲間たちと連れ立って、日々遊んで過ごすようになっていった。後に信夫が執筆した自叙伝「もの作りに魅せられて」の中で、信夫はこの頃のことを『世間を肌で感じる事ができ、貴重な様々な体験をすることができた』と回顧している。しかし、そんな信夫を見かねた母は、信夫が18歳になった頃、亡くなった父の後を継いで工場を切り盛りしていた叔父のところへ信夫を送り出した。

当時、叔父の経営していた福島製作所は、主に業務用の冷蔵庫を製作していた。今でこそ家庭用電気製品の代表格となった冷蔵庫だが、当時はまだ冷蔵箱とも呼ばれ、大半は木製で、上部に氷塊を入れる引き出し、下部に食材を保管する棚、その周りをもみ殻やおがくずを敷き詰めた中空の壁で覆った木製家具であった。亡くなった信夫の父が試作・開発した冷蔵庫はヒット商品になり、信夫の入社時には30名ほどの職人を抱えるまでに成長していた。その中で、営業として叔父に鍛えられていった信夫は、百貨店や茶房、料亭など様々な顧客を担当するようになり、仕事に打ち込んでいった。



当時の冷蔵庫(冷蔵箱)

内部にはコルクやもみ殻、おがくずなどが詰められた中空の壁があり、その上部に氷を入れるための皿や仕切りが設けられていた。氷で冷やされた冷気が下部で循環し、食材を保存できるようになっている。

戦中戦後の混乱のなかで

自分の生きる道を見つけた信夫だったが、1930年代後半からは日本国内も戦争の色が濃くなっていき、福島製作所の仕事も軍需品の製造が主なものになっていった。そんな状況下の1944年の初夏、ちょうど国内にサイパン陥落のニュースが入ってきた頃、信夫も軍からの召集がかかり入隊することとなった。

大阪の軍施設で任務にあたることとなった信夫は、海外で行われる戦闘の第一線に派遣されることなく終戦を迎えることとなったが、入隊翌年から大阪大空襲に見舞われ、暮らしてきた街が焼かれていく様子を目の当たりにすることとなった。幸いなことに福島製作所の工場は被災を免れたものの、周辺は焼け野原になっており、とても営業を継続できる状態ではなく、一時閉鎖に追い込まれた。

終戦から1ヶ月後、空襲によって家を失った信夫は、同じ境遇の叔父、その息子とともに宿暮らしをしながら、事業再開に向けて動き出していた。戦火を逃れて散り散りになっていた職人たちも徐々に大阪に戻り、体制が整い始めると、信夫は大阪府庁に存在した特需課へと出向き、駐留軍向けの冷蔵庫や製氷箱の注文を引き受けた。その後、精肉業者向けの冷蔵庫や飲食店向けの厨房設備など、手探りながら徐々に取り扱う製品の幅を広げつつ、何とか戦後の混乱期を乗り越えようと奔走した。

しかし、信夫らの尽力は1950年に勃発した朝鮮戦争によって志半ばで潰えることとなる。順調に注文を伸ばし、関西の有名百貨店への商品納入が決まっていた時、深刻なインフレが日本経済を襲ったのだ。原材料費が一気に2倍にも3倍にも跳ね上がるなか、提出済みの見積金額では到底採算がとれず、しかし請け負った以上は断るわけにもいかず、福島製作所には倒産以外に進むべき道が残されていなかった。

社長である叔父が債権者たちの矢面に立って、倒産の後処理を買って出てくれたものの、信夫も会社の役員として名前を連ねていたことから、当然ながら手元に残る資産は何一つなく、会社倒産の苦しみ、悲しみを噛み締めながら、裸一貫で再スタートを切らざるを得なくなった。



1962(昭和37)年に開発された
業界初の業務用規格冷蔵庫

オーダーメイドに比べて安価で、設置も容易、故障率も低いなど、魅力の多い商品だったが、前例にとらわれた現場からの反応は、当初惨憺たるものだった。

「冷蔵庫の規格化」でメーカーへ

倒産の残務処理も終え、叔父とも別れた信夫は、兼ねてからの取引先からの勧めもあって自分で事業を始める決意を固めていた。資金も設備も土地もない状態だったが、「モノを作って、それを売ること」が自分の生き方だと確信していた信夫は、電話帳を片手に目ぼしい先を調べて訪問・交渉し、何とか借りる算段をつけて環境を整えた。何の資産も保証もない信夫が、それらを貸してもらえたのは、ひとえに信夫自身の人柄と事業への熱意があつてこそそのものだろう。こうして、1951(昭和26)年、信夫は冷蔵庫や厨房機器の修理をメインとした福島工業株式会社を大阪市旭区に設立した。

やがて日本経済が回復基調になり、百貨店や小売店が勢いを取り戻すと、信夫は修理から製造へと本業を転換し、大量に舞い込む注文に応じていった。それに加え、1950年代半ばには、爆発的なアイスクリームブームが巻き起こり、冷凍庫や貯蔵ボックスの需要が一気に増加した。1956(昭和31)年、信夫は工場を現在の福島区御幣島に移して、拡大する需要に応えられる生産体制を構築していった。

そうして順調に成長していた福島工業だったが、一方で信夫は製造・販売システムの刷新が必要だと感じていた。当時、業務用冷蔵庫は一品一品顧客と協議したうえで作るオーダーメイドが一般的だった。「打ち合わせに多くの時間と経費がかかるやり方では、今後いっそう増えていく注文に応えられない。この仕組みを変えるしかない」と考えた信夫は、「冷蔵庫の規格化」によって状況を打開しようと試みた。それは同時に、依頼された機器を作る下請けの業態から、独自製品を作るメーカーへの転身も意味していた。1962(昭和36)年、日本初の業務用規格冷蔵庫「ERシリーズ」を開発すると、それまで競争相手だった厨房業者や、その先にいる料理人に売り込みを図った。だが、価格も安く、量産品のため故障率も低い素晴らしい製品ができたと確信した信夫の期待とは裏腹に、いっこうに売れ行きは上がらなかった。その背景には、それまで冷蔵庫の配管工事や修理で儲けてきた業者、および今までオーダーメイドが当然だった現場の料理人からの「自分の好み通りでなければ納得がいかない」という反発があった。

とはいえ、自分たちが素晴らしい製品を作っているという強い自負があった信夫は、展示会等へ積極的に参加してアピールしたほか、顧客一軒一軒を回り、どれだけの利益があるかを説いていった。しかし、そんな努力も簡単には成果に結びつかなかった。

冷やす技術は世界へ広がる

製品の良さをどうすれば分かってもらえるか、と考えながら過ごしていたある日、信夫を不慮の事故が襲った。信夫の運転する車の横から、別の車が猛スピードで突っ込んできたのだ。衝突の瞬間、外に弾き飛ばされ意識を失った信夫は、すぐに救急車に運ばれ入院することとなった。駆け付けた家族が「これはもうダメかもしれない」と感じる程の大ケガだったが、意識を取り戻してからは順調に回復していった。そうして、命に別状がないと分かった信夫の心配事は、すぐさま自分の体ではなく、新しく開発した冷蔵庫のことに戻っていった。後日、社員が病室に見舞いにくると、信夫は顔を見るや否や「売れ行きは怎么样了?」と尋ねた。「少しずつですが、注文が入るようになりました!」という社員の言葉を聞いた信夫は、5年ほどに及ぶこれまでの苦勞が報われた思いがして、溢れる涙が止まらなかった。

その後、規格冷蔵庫の売上を順調に伸ばしていくと、1964(昭和39)年には第2次スーパーマーケットブームに合わせてオープンショーケースを開発し、自社販売もスタートさせた。これが下請けからの明確な脱皮となり、同時にメーカーとしてのスタートにもなった。今に続く「自主独立の精神」は、この時に生み出されたのである。

その後、冷蔵庫とショーケースは、2本柱として福島工業の業績に大きく寄与していった。1984(昭和59)年には岡山工場を建設し、名実ともにメーカーとしての「福島工業」を確立させていった。1994(平成6)年には現社長・福島 裕氏の主導で株式上場を果たし、その翌年には滋賀工場を建設。現在では、世界11カ国に進出するグローバル企業として、世界中に「おいしく冷やす」技術を広め続けている。



35歳頃の信夫

御幣島の工場で働く姿。日本経済の復興期にあたるこの時期、ホテルやデパートからの引き合いが殺到し、多忙な日々を過ごしていた。

思いが体験へ、体験が信念へ

父が亡くなった際、信夫は幼心に「自分が何とかしなければ」と考えていた。晩年、信夫は執筆した著書の中で、子供の頃の想いこそが、今日の福島工業を築く基礎になっていたと回顧している。

—「何とかしなければ」という思いを「何とかする」という体験に変える。(中略)まだ20代の私は、相談する人もなく、自分一人で全霊をこめて問題に取り組むという体験をさせられました。そして、自分で「何とかした」体験が後になって「やればできる」という信念にまで高められたのだらうと思います。

信夫は1992(平成4)年、依然として活力に溢れ、体力的にも問題なく、かつ本人曰く「(後任の若手達が)まだ少し後を継ぐには難しいかもな」と感じていたという70歳の時に、信夫は社長の座を退いた。普通であれば、「それならば後継者が育つまで、もう少し自分が会社を引っ張ろう」と考えそうなところだが、信夫がこのタイミングを選んだ背景には「後継者たちが『自分たちが、やらなければ』と思える方が、より成長してくれるだろう」という考えがあったことだった。

「何とかしなければ」という思いを、「何とかする」という体験に変え、「やればできる」という信念にまで昇華させる。福島工業は、信夫の残した「思い」「体験」「信念」を持った次世代の社員たちによって、No.1の技術力をもった「コト作り企業」という夢の実現に向かって、今後も羽ばたき続けていく。



福島工業が現在取り扱う製品の一部

現在、福島工業は生活者・お客様・社員・お取引先の4者の幸せを実現する「幸せ創造企業」を目指し、企業理念に「幸せ四則」を掲げ、食生活品質の向上に寄与しつづけている。